

障害児に関する研究

——統合保育の効果について——

研究第7部 野田幸江・高橋種昭

I はじめに

障害児の早期発見、早期治療の有効性が強調されるようになるに従い、障害そのものの軽減・克服をはかる専門的な治療と同時に、子供集団への参加を推進する事により、より広い意味での社会適応の能力を増す実例が次々に報告され、今や障害児の治療を考える場合、この両者は不可欠のものとして扱われている。

かつて障害そのものへの治療に目が向けられていた時は、むしろ障害別における事が、より専門的なアプローチを可能にし治療効率を高めるものと考えられていた。しかし特定の治療者や、同じような障害を持つ者のみの集団の働きには、おのずから限界がある事が経験的にとらえられ、健常児との統合保育が試みられ、意外な効果をあげ得た事が報告されるに従い、統合保育へと関心が深まって行ったのは、当然の帰結であろう。

特に自閉的と呼ばれる子どもにとっては、自閉的なるがゆえに、他に対する関心が旺盛であり、他に働きかける力を充分に持つ健常児との交流が大きな意味を持って来る。

○月○日

自分一人の力でつなぎ合せたプラレールを満足気にながめていたA君が、ようやく汽車を走らせ始める。走る汽車を目で追ひ、ひとまわりして来た時、彼は立ちあがり、両手をたたきながら飛びはね、その喜びを全身であらわす。すぐ腰をおろし走り去る汽車を目で追う。そして汽車が近づくと再び、立ちあがり、両手をたたき、飛びはねる。同じ動作が、何度もくり返される。かなり離れた所でコマ遊びをしていたO君のお尻が、いつの間にか、コマの移動と共にプラレールの上に、おおいかぶさるように近づいて来ている。やがてレールの上にとっかりとのり汽車の走るのを防害。「どうするかな」と思う間もなく、A君はツツカと歩み寄りO君のお尻を押す。O君は、まったく知らぬ顔。たまりかねたようにA君が「どいて」と一言。今

日はじめてきくA君の言葉。しかし、O君には通じない。おどろて汽車を力一杯、壁に向かって放りなげる。

A君が自分の意志を他人に伝えるために、せつかく使った言葉だったのに……

これは、1人のようやく言葉を獲得し、単語程度でなら相手に要求が出せる程になった5歳になる自閉児のある日のセラピーの記録からの抜粋である。A君が、やうと使った言葉が有効に働き、言葉というものの持つ意味を知るためには、「どいて」という要求が、的確に相手に伝わった事がわかる反応が返って来ることこそ必要なのではないだろうか。「大人が通訳なり、仲介の役をとればO君をどかす事も出来ただろう。でも、あれ程はつきり言ったのだから、もしも、これが健常児とのふれ合いの中で起った事だったら、すぐどいてくれるだろうし、そうしたらA君にとって、とても意味のある体験になったはずなのに……」というセラピストが語った言葉の意味は大きい。確かに基本的な1:1の関係が成立し、他の子供への関心がみられるようになれば、健常児との共同生活は、大人が教える事の出来得ない多くのものを障害児に与えてくれるはずである。

しかし、その事が受入れ側の非常な努力により、効果をあげはじめて来ると、集団に参加させる事が即、治療であるかのような錯覚にとらわれ、子供の状態いかにかわらず、年齢が来れば集団へ、という安易な考えがおこり、それが差別否定、あるいは「福祉政策の一環としての共に生きる事の大切さ」の波にのって、ますます強められて来つつある事もまた事実である。そして、それは、他力本願的な母親が増加しつつある事によって一層の拍車がかかり、今日の社会的関心のたかまりとなっているのであろう。

事実、幼稚園においては、すでに昭和40年頃より活発な統合保育の報告がされるようになってきている。一方、障害児保育の十分な条件整備もなされぬままに実施されるならば、かえって多くの問題を生ずるとして、むしろ慎重な態度をとっていた保育園においても、昭和45年頃よ

り障害児指定保育園構想なるものが、打ち出されるに至り、統合保育は、もはや特別のものではなくてきていっているといつてよいであろう。

過去において集団参加を可能にする事を目標に、幼児へのアプローチを主として行って来たわれわれが年の暮れともなれば「何と少しでも集団参加の経験を」と願う子供達を受入れてくれる園を探すことに多くの時間をさかねばならなかった事を思えば、統合保育への現在の関心の高まりは、さらに量から質への転換を可能にする時期に来ているとの感が強い。

そこで、われわれの20年間に及ぶ実践を通じ、今回行った実態調査が示す傾向を加味しながら統合保育のもつ問題に検討を加えてみよう。

II アンケート調査の概要

東京都内、港・新宿・練馬・江東・墨田・葛飾・荒川区内の公私幼稚園及び保育園に在園する主として自閉的傾向を持つと思われる幼児について質問紙を配布し、回答を依頼した。障害児として自閉的傾向にしばつたのは、在園児数が多いであろうと考えたこと、集団参加に問題が生じやすい特長をもつ事、われわれの実践もまた、自閉的傾向を持つ子を中心にしたものであるという理由からである。

調査は、昭和55年3月に行なわれたもので、その当時の子供の園での状態を、運動・適応・課題・遊び・生活・対人関係・言語の7つの領域別に質問を設定（付表参照）それに答えてもらったものである。

保育の一応の区切りの時期ということで、調査期時を3月にしたことが、保育者の多忙さのためか、回収率23.4%ときわめて低いものとしてしまった。

回答がよせられた園は、全部で112園で、そのうち該当児なしの園は30園、1園につき2名分の質問紙を送付したが、1名分の回答のあったものが45園である。

回答がよせられた該当児の年齢は第1表に示す通りであり、それらの子供達が受けている保育期間を示したのが第2表である。

該当児に就学過年齢が1人もいなかったのは昭和54年度より実施されはじめた全員就学のあらわれとみてよいであろう。

当然のことながら在園期間も1・2年のもので67.8%を占めている。これに対する保育者の担任期間との関係であらわたのが第3表であり、在園期間を通じ（一年間のものを除く）ほぼ半数のものが、同一の保育者に受けもたれている事がわかる。

担当保育者の交代の是非は、しばしば論議のわかれるところであるが、一概に結論づける事は出来ないようである。

第1表 園・年齢別回答児数

	公 保	私 保	公 幼	私 幼	不 明	計
6 歳 (48.4~49.3)	22 38.6%	6 24.0%	8 66.7%	5 22.7%	1	42 35.6%
5 歳 (49.4~50.3)	23 40.4	9 36.0	2 16.7	14 63.7	1	45 41.5
4 歳 (50.4~51.3)	9 15.8	7 28.0	1 8.3	3 13.6		20 16.95
3 歳 (51.4~52.3)	2 3.5	3 12.0				5 4.2
2 歳 (52.4~53.3)	1 1.8					1 0.8
不 明			1 8.3			1 0.8
計	57	25	12	22	2	118

第2表 対象児の保育期間

	公 保	私 保	公 幼	私 幼	不 明	計
1 年未 満	15 8.8%		3 25.0%	5 22.7%		13 11.0%
1 年 未 満	18 31.6	13 52.0	4 33.3	8	1	44 37.3
2 年	22 38.6	4 16.0	4 33.3	5 22.7	1	36 30.5
3 年	5 8.8	3 12.0				8 6.8
4 年	5 8.8	5 20.0		1 4.5		11 9.3
5 年 以 上	1 1.8					1 0.8
不 明	1 1.8		1 8.3	3 13.6		5 4.2
計	57	25	12	22	2	118

第3表

担任期間 在園期間	一年未満	一年	二年	三年	四年	不明	計
1 年未満	13						13
1 年	2	41				1	44
2 年	2	15	18			1	36
3 年		3	1	4			8
4 年		6	3		2		11
5 年以上			1				1
不明						5	5
計	17	65	23	4	2	7	118

ある。われわれの臨床経験の中でも、非常になつき、両者の関係がうまくいっている場合、ただでも人や場になれにくい自閉児にとって、その保育者がそのまま園にいるというかたちでの担任交代は、思いもかけない問題を生むようである。すなわち、もとの担任の方により接触を求めて来た場合の、その旧担任のその子供に対する扱い、新しい担任へのおもわく等が、保育者同志の人間関係をぎこちないものにしだり、新担任、のその子供へのとりくみの意欲に影響を与えた例も多い。また、母親が持ちあがりを強く望んでいた場合、新担任をみる目は厳しく、両者の信頼関係を作り出すまでに、かなりの時間を要してしまうことがあることも1年という区切りのある保育活動の中では考慮しなければならないものであろう。一方、保育者の持つ個性の違いが、子どものそれまで見過ごされて来た面の思わぬ開発を促す結果となった例も少なくない。まさに、それぞれの園が試行錯誤している事を知らせる結果ともいえるであろう。

参考までに、担任保育者の保育経験は第4表に示す通りである。経験3年以上の者が81.4%と過半数を占め、

	公保	私保	公幼	私幼	不明	計
10年以上	10.17.5	4.16.0	4.33.3	5.22.7		23.19.5
5年以上	27.47.4	8.32.0	5.41.7	2.9.1		42.35.6
4 年	7.12.3	5.20.0		2.9.1	1	15.12.7
3 年	5.8.8	3.12.0	1.8.3	7.31.8		16.13.6
2 年	3.5.3	1.4.0		1.4.5	1	6.5.1
1 年	2.3.5	2.8.0		4.18.2		8.6.8
1年未満		1.4.0				1.0.8
不明	3.5.3	1.4.0	2.16.7	1.4.5		7.5.9
計	57	25	12	22	2	118

さすがに、経験のある保育者によって保育されていることがわかる。

III 結 果

<現在の状態像>

質問は、先にも述べたように7つの領域にわかれ、運動8問、適応13問、課題7問、遊び11問、生活10問、対人関係10問、生活8問の計67問であり、回答は3段階評価にチェックしてもらった方法をどした。

まず3段階評価の回答に、問題となりやすい行動がよくみられるとしたものに2点、時々みられるとしたものに1点を与え、得点化を行う。総得点の分布は第5表に示す通りであり、領域別の修正した最高得点を20点として平均得点をあらわしたのが第6表である。

第5表

得点	11	21	31	41	51	61	71	81	91	101	平均	S.D.	
人数	3	3	10	12	21	28	16	10	7	4	1	5.79	2.06

第6表

	4 歳	5 歳	6 歳	計
運動	9.85	9.73	9.95	9.84
適応	7.41	6.89	6.18	6.82
課題	9.88	10.49	9.98	10.12
遊び	9.62	9.49	9.08	9.40
生活	5.75	6.07	5.34	5.72
対人関係	6.24	6.75	6.75	6.58
言語	11.28	8.35	7.51	9.05

ごくわずかではあるが、適応、遊び、言語の領域で年齢が大きくなりに従い、問題行動の得点が減じているのがわかる。また、生活習慣の自立、園のきまりの理解など、生活に関する領域で得点が低く、保育者の指示に従えるかどうか等、課題を与えられた時の反応に関する領域では高い得点が出ていることは、決まった事をくり返す、いわゆるパターン化する事は容易でも、その場に即応したものが要求される指示に応ずる事の苦手な自閉児の特長が浮きぼりにされているとみてよいであろう。この傾向は、保育の中でも利用されやすく、ややもすれば決められた席についていられる皆と一緒に弁当が食べられるようになる、登園・降園時の仕度が出来ると、一見して変化のどちらかへやすい行動を身につけさせる事が優先されがちである。事実、統合保育の効果として、それ等の現象をとりあげる事も多い。しかし、一見保育効果のようにみえる、それ等の行動も、もしそれが目標達成のためにただ1つのパターンとして身についたものにしか過ぎない場合には、問題を残すであろう。確か

に、そこに自分の意志の介入があろうとなかろうと、望ましい行動のパターンが身につけていけば、まわりの者がうける印象も違い、そこから両者の関係がよいものに発展して行く可能性も見落すことは出来ない。しかし、保育のねらうものは、そのみではないはずである。むしろ、そこに他を認識した自己がかかわった上での決定を、する力を持つこと等、成長の基盤となるものを育てる事にこそ注目しなければならないであろう。

1つの例として、セラピストがある公立小学校特殊学級を見学に行った時の記録をあげてみよう。
3年生になるという男児が教室のすみに坐りこみ、くやしそうに自分の手を、歯がたがづく程かんでいる。目からはポタポタと涙が落ちている。

「何でもわかっているのに、これくらいは事は、ちゃんとやって欲しいと思って少し強く注意すると、いつもこうなってしまうて、やさしく言ってもやってくれないじ……」といいながら、何とか彼をなぐさめようと近づく先生に、ますますおびえたように体を堅くし、歯をくいしばるB君。

B君にとって、先生の注意は自分のすべてを否定された事になるのだろう。これは自己を否定された不安から、必死に自己を守ろうとしている姿ではないのか。順調に育っている子供であつたら行動を非難された事が、即全人格の否定にはつながらなければならないのに、B君には、その分化がまだ十分でないのだろう。

叱られるたびに、そんな不安にさいなまれるB君に、ある行動をとらせようとする事が、どれ程むなし事であるか、今のB君に教えなければならないのは、定められた作業をする事でも、わが身を傷けてはいけない事でもなく、叱る事が即、「あなたを否定する事ではない」という事なのではないだろうか。

そう考えた時、就学前にやっておかなければならない事が何であるかを、きちんととらえておく事の重要性を、恐ろしい程感じた。

このセラピストの記録の示唆するものは、障害児の幼児期に深くかかわるものとしての保育者1人1人が、決して見落してはならないものであろう。

なお、幼稚園・保育園、公立・私立、別に平均得点の上での差の検討を行ない、遊び・生活の両領域において、保育園・幼稚園に2.5%水準で有意差を認めたとすなわち、遊びの領域では、保育園で高い得点をとった者が多く、生活の領域では、幼稚園において高得点をとったもの割合が多くなっている。

公立・私立の比較では全領域に有意差は認められなかった。

自閉的な傾向を持つ幼児を集団に出す場合、よく問題となる多動についてみると、予想以上に少なく、その行動が半数以上にみられるという問題は1つもない。それはわれわれの臨床経験の中で、保育者から相談を受ける頻度の高いものを選んで設けた施設が、その問題の性質上、そういう子供がいれば非常に問題となるが、それ程一般的なものではなかったという事かもしれない。園からの脱走などに対する結果が、その辺の事情を如実に語っているようである。なお全体を通じて5歳児と6歳児を比較してみると、すべての間において明らかに問題行動が減じている事を示す数字が出ているが、4歳児と5歳児を比べると、むしろ逆の事がいえる。これは、4歳

第7表

			みられる	時	みられ	No ans	
			%	%	ない	%	
多動	4歳	8	29.6	7	25.9	12	44.4
	5歳	11	23.9	16	34.8	19	41.3
	6歳	10	23.8	13	31.0	19	45.2
危険	4歳	4	7.4	22	40.7	27	50.0
	5歳	15	16.3	21	22.8	54	58.7
	6歳	2	2.4	26	31.0	56	66.7
脱走	4歳	0		3	11.1	23	85.2
	5歳	0		8	17.4	37	80.4
	6歳	0		2	4.8	40	95.2
保育の害	4歳	1	3.7	5	18.5	20	74.1
	5歳	6	13.0	13	28.3	26	56.5
	6歳	3	7.1	11	26.2	28	66.7
禁守れな	4歳	6	22.2	13	48.1	5	18.5
	5歳	18	39.1	11	23.9	16	34.8
	6歳	8	7.1	18	42.9	15	35.7
遊邪	4歳	5	18.5	5	18.5	17	63.0
	5歳	5	10.9	19	41.3	22	47.8
	6歳	4	9.5	10	23.8	28	66.7
生立	4歳	9	33.3	6	22.2	12	44.4
	5歳	9	19.6	6	13.0	29	63.0
	6歳	5	11.9	13	31.0	24	57.1
担認	4歳	22	81.5	3	11.1	2	7.4
	5歳	44	95.6	1	2.2		
	6歳	35	83.3	3	7.1	4	9.5
言遅	4歳	6	22.2	12	44.4	9	33.3
	5歳	11	23.9	15	32.6	19	41.3
	6歳	9	21.4	14	33.3	18	42.9

の対象児が少ない上、保育園児が多く、すでに何年かの保育経験があるのに対して、5歳児は就園年齢に達した子供が当然の事として入園し、ようやく1年間の保育が終ったという対象児が多かった事に由来するものと考えられる。

＜母親像＞
一般的な保育においても保育効果をあげるためには、母親指導をなおざりにする事が出来ないが、子どもに問題がある場合は、母親自身も問題をかかえている場合が多く、統合保育を推進して行くためには、その対策をたてる事もまた重要なこととなる。そこで保育者が対象児の母親にどのような問題を見出しているを知ろうとしたものであり、よく保育者から語られる次の問題をあげ、

- (1) 他の母親となじまない
- (2) 園や保育者への要求が高い
- (3) 保育者に対して心をひらかない
- (4) 本児の持つ問題がよくわからでないようである
- (5) 本児のもつ問題を認めたくないようである
- (6) 本児に対して無関心である
- (7) 本児に対して過保護すぎる
- (8) 園の指示に非協力的である

それ等の行動がみられるかどうかをたずねたものである。

問題なしと答えたものは、42名で全体の35.6%をしめ、問題ありとされたものの、うちわけは第8表の通りである。

「子供の問題を理解していない」あるいは「認めようとしていない」事と過保護な母親の態度が問題となっているCaseが多い事がわかる。これは子供がまだ幼児期である事による特長ともいえそうである。

第8表

	回答数
他となじまない	18
要求が高い	42
先生と親しまない	20
問題がわかっていない	42
問題を認めない	30
無関心	6
過保護	31
非協力	14

＜受入れ側の意識＞
次に受入れ側として、対象児の入園を積極的に受入れたものであるかどうか、対象児を保育したことを、ど

う受けとめているか等についてたずねた。それは、まだまだ障害児を受入れる事が一般化していなかった頃には、われわれのエネルギーも、その子供が健常児と共に過せる集団の中に入る事の重要性をとき、入園を許可してもらうところまでこぎつける事に、費やされたが、最近のように、それを拒否する事は時代の流れに逆らうことにもなりかねない機運の高まりの中で、受取る側の問題へのとりくみに違いのある事を感じはじめていたからである。

事実、セラピーをしている中にも、まだまだ母親との1対1の関係が成立しておらず、他の子供に対する関心もほとんどなく、いかに該当年齢に達したからとはいえ、刺激の多い集団に入れる事が、むしろ本人の成長の順序性をくずしてしまうと考えられる5歳児が、母親の熱意におし切られ、入園してしまう例も少なくない。

その結果、子供も保育者もくたびれてしまう例。ただ子供の型としての行動の変化を追う事だけに終始してしまう例などが多くなっているのも、むしろ当然のことであり、今後、子供の成長にかかわる者としてのあり方が、母親指導と共にきびしく問われなければならない問題であろう。

第9-1表

	園として	担任として
積極的に受入れた	24	31
当然の事として受入れた	50	71
仕方なく受入れた	10	3
しらずに受入れた	16	9
その他	14	1

まづ対象児の入園に対して、積極的に、あるいは当然のこととして受入れたとするものが半数以上を占めている事は、保育界の統合保育に対する意識の高まりを示す数字とみてよいであろう。園としてよりも担任個人としての意識の方が、より積極的であることは、人と人のふれあいである保育という営みの中では、より重視されなければならないし、保育を受ける側の障害児にとっても心強い限りであろうが、園全体としての障害児へのとりくみに対する姿勢は、そこで働く保育者のそれに与える影響も大きく、むしろ、ここまで高まりつつある保育者の意識を今後、どのように援助し発展させるかは、園としての姿勢をどう作って行くか、今後の問題となるであろう。園としてよりも個人としての積極性が出た事は、この回答をよせられた保育者の保育経験の長いものが多かった事によっているのかもしれない。(第9表)

なお、受入れの積極さには、子供の状態がどれ程の影

第9-2表

	園として		担任として	
	自閉(+)	自閉(-)	自閉(+)	自閉(-)
積極的に受入れた	3	3	5	5
当然のこととして受入れた	10	7	16	15
仕方なく受入れた	2	1		
しらずに受入れた	5	1	1	
No ans	2	3		

響を与えているかをみるため、全体を通じ先の問題行動の得点から、上位20名、下位21名を抽出し、その両群について検討を加えたのが第9-2表である。ここでは園としても、担任としても、両群がほぼ同じような傾向を示している事がわかる。という事は、子供の状態いかんよりも、やるべきだとする理念の方が先攻している傾向を示すものとみてよいのではないだろうか。

第10表

	自閉(+)		自閉(-)	
	回答数	%	回答数	%
楽しい事も多かった	76	57.1	12	42.9
他の子供への影響が気になる	23	17.3	5	17.9
専門家にまかせるべき	12	9.0	6	21.4
その他	22	16.5	5	17.9

次に「該当児を保育してみても」という質問に対しては第10表のような回答を得た。ここでも、困った事もあったが、楽しい事も多かったとする肯定的な気持を表現したのが全体の57.1%を占め、入園に際しての積極的な気持が、決して、その場限りのものでない事を示している。ただ「他の子どもへの影響」が気になったとするもの、あるいは専門家との連携を必要とするものがある事への注目も忘れてはならないであろう。事実このことは保育者との話し合いの中でも、しばしば保育者から指摘される点であり、そこには相反する2つの感情が流れている事を経験する事も多い。すなわち、障害児へのアプローチが先行するあまり、健常児へのとり組みがあらくなりがち保育の中で、健常児をも大切にしていかなければと思う気持から、なげかけられる疑問と、それを前面に押し出す事によって、自己の障害児を保育する事への否定的な気持を合理化してしまう場合とがあるからである。

○月○日、園庭に大きな積木を使つて、4~5人の子供が飛行機を作

らている。1人のリーダーのもと一致協力。今まさに全員が乗ろうとした時、目にもとまらぬ早さで走って来た自閉症児の体がぶつかり、苦心してバランスを保たせた翼の片方が、無惨にもこわれた。次の瞬間、自閉症児の姿はなかった。一瞬の異様な静けさのあと、2人の子供が20分以上もかかって自分達で作った自分達の飛行機をけ散し、こわじ始めたのは、まったく同時であった。他の子供も加わる。一言もなく、ただ積木に体当たりして行く姿が、彼等の怒りのすごさを表現しているようであった。

先生がどんで来る「ごめんなさいね。B君、わざとやつたんじゃないと思うのB君まだ赤ちゃんではよ、みんなはもうお兄さんなんだから……。がまんして」

以上は2年間のセラピーの後、幼稚園に通うようになったB君の幼稚園へ、その後の様子をみに行ったセラピストによって報告された保育室での一コマである。自分のやった事が非難されない自閉児にとって、この幼稚園の空間は確かに住みよい所であるだろう。しかし、20分以上もかかり、自分達の力を出し切つて作ったものを、いかにわざとではないといえ一瞬のうちにこわされてしまった子供達のくやしさを思えば、その上がまんする事を要請する事がよかったかどうか、くやしさをやわげるためにまず作りなおしてあげる保育者の思いやりが、子供達に、他の人間を思いやるやさしさを育てて行くのではないのか、思いやってもらえる事もなく、思いやる事を、強制される結果が、結局はあの子さえないなければという気持を育ててしまう事にもなりかねない。まわりの子供を育てる事が、結局はそこにいる障害児を育てる事になるという指摘は、多くの経験者によつてされているし、「共に育つ保育」という事はやさしい、じかじ実践する事のむづかしさは、今後の保育者養成にかかわる問題であり、統合保育を成功させて行くかどうかの鍵となるであろう。

専門機関との連携についても同じような事がいえ、これ等の問題への適切な対処がのぞまれるであろう。

次に、今後担任する意志の有無についてたずねた結果をあらわしたのが第11表である。ここでも「やってもよい」と肯定的な答えをしたものが全体の66.9%を占め、保育者の積極的な姿勢をみることができる。ただ自閉性の強弱により、「やってもよい」とするものと、「もう少し軽ければ」とするものとの多少が入れかわっている事。当然といえば当然だろうが、全体を通してみた場合にはその傾向は弱められるが、両端をどんで検討した場合、やはり今後続けて行くか否かの意欲には、受持つた子どもの状態が影響を与えていることがわかる。

第11表

今後の担任	回答数	自閉(+)	自閉(-)
	%	%	%
やってもよい	79 66.9	8 38.1	16 80.0
もう少し軽ければ	16 13.6	11 52.4	1 5.0
もう少し重くても	3 2.5		2 10.0
やりたくない	2 1.7	2 9.5	
条件づきでなら	13 11.0		
その他	5 4.2		1 10.0

第12表

専門機関に	回答数	自閉(+)	自閉(-)
	%		
通っている	61 51.7	13	7
通っていた	7 5.9	2	2
通っていない	48 40.7	6	11
No ans	2 1.7		

専門機関との連携は保育者が望むからという消極的なものではなく、むしろもっと積極的に推進されなければならない問題であろう。参考までにこの調査対象児の現状をみると次のようである。専門機関がどのようなものであるかは今回の調査ではふれていないが、57.6%のものがかわりを持っている事を示す。

第13表

	通っている	いない
	いた	
他となじまない	10	8
要求が強い	7	5
先生と親しまない	6	14
問題がわかっていない	18	24
問題を認めない	14	16
無関心	2	4
過保護	19	12
非協力	6	8
問題なし	29 48.3	12 25.5

さらに、その専門機関に通っていることが、母親の態度に、影響を与えているかどうかをみるため、その母親の態度とクロスさせたものが第13表である。専門機関に通っている、またはいた事のあるものに問題のない母親

が多く、また、いない者に問題が多い事は当然といえば当然の事といえるが、当然の事であるだけに適切な対策がたてられれば、よい結果が得られる可能性も大きい事を忘れてはならないであろう。

IV おわりに

障害児保育の効果に関しては、現在多くの人々の意見がきかれるが、結論については、その意見の間にかなりのずれがみれるのが現状である。

そうした意見のずれを招いた背景には、一口に障害児といっても、その障害の程度や種類にさまざまなものがあるという障害児の側における問題や、受入れ側の体制設備などの条件の違いなどがあるのは当然である。われわれが行った調査の場合も、そうした障害児の側の条件と、保育する側の条件とのからみあいの中で、その効果について検討することを目的としたものであり、調査もその線にそって行なうたわけである。しかしながら、回収率の低さや、調査内容のかたより、不備もあり必ずしも満足できる結果を得たとはいいがたいものとなってしまった。今後、できれば、さらに障害児の種類・程度と受入れ側の条件についてくわしく調べ統合保育の効果についての正しい評価を考察し、障害児保育の発展に寄与することを念願とし、研究を進めて行くつもりである。同時に障害児保育は決して個々の保育者の善意のみで効果をあげられるものではないことは当然であり、高度な保育技術の開発が必要になる。そのためには保育現場からの障害児保育についての活発な保育学的アプローチによる研究が大いに期待される。

おわりに、今回の調査に御多忙中にもかかわらず快く、回答をお寄せ下さった保育園・幼稚園の先生方に深く感謝の意を表したい。

【参考文献】

- 「子どもに学び、子どもと共に」：子供問題研究会編
- 「ちえ遅れの子どもの統合・交流教育」：人位頭義仁
- 「育つ」No.16 特集 自閉症児の教育
- 神奈川児童医療福祉財団

〔附表〕質問紙の領域別項目

- (1) 皆と同じ早さで歩いたり、走ったりすることができない。
- (2) はさみが使えない等、指先きのこまかい動きを必要とする作業ができない。
- (3) 極端に動作が遅い。
- (4) 戸外遊具をつかってひとりて遊べる。
- (6) 音楽遊び、リズム遊びについて行けない。
- (6) クラスの子供達の活潑な遊びについて行けない。
- (7) 運動会に参加させても集団からはずれてしまう。
- (8) 激しく動きまわる。
- (9) 順番が待てない。
- (10) いじってはいけないものを勝手にいじる。
- (11) 自分と他人のものとの区別がついていない。
- (12) 特別な場所や物に固執し、それからの移行が困難である。
- (13) 移動する時いちいち保育者の手助けを必要とする。
- (14) 思い通りにならないとパニックをおこす。
- (15) 一旦機嫌をそこねると、もどにもどすのが大変である。
- (16) 危険な事をする。
- (17) 他の子どもをつきとばしたり危ないめにあわせた事がある。
- (18) 自分のクラスがわかっている。
- (19) 園から外へ出て行く事は無いが、決められた教室にはいない事が多い。
- (20) 園の外へ出てしまう。
- (21) (自分への関心をひくため・危険な事をするため)、一斉保育を中断しなければならない事が多い。

課 題

- (22) 先生の指示にのらず勝手な事をしている。
- (23) (個人的)に指示されたことがわかる。
- (24) 好きな事はやるが嫌いな事はやろうとしない。
- (25) 皆と一緒になるようにする気持はみられるが、出来ない事が多い。
- (26) 指示された事は一応やるが長続きせず、すぐやめてしまう。
- (27) 禁止が守れない。
- (28) 一斉保育の時(ただその場にいるだけだが先生がそばについていれば他の子どもと変りなく)保育に参加してられる。

遊 び

- (29) 玩具で遊ばない。
- (30) ふらふらと歩きまわっている事が多い。
- (31) 玩具や遊具以外のもので遊ぶ。
- (32) 遊具でよく遊ぶ。
- (33) 気に入ると1つの遊びをくり返している。
- (34) ルールのある遊びに参加できる。
- (35) 単純な遊びなら一緒に遊べる。
- (36) (追いかっこ・鬼ごっこ)ができる。
- (37) 何んとなく子どものいる所を好んでいる様であるが一緒には遊べない。
- (38) 他の子どもの遊びの邪魔をする。
- (39) 物をなげる。

生 活

- (40) (小便・大便)が自立していない。
- (41) きめられた部屋で食事をしない。
- (42) 食事をこぼす。
- (43) 食事の時、全員の準備がととのうまで待てない。
- (44) 他の子どものお弁当をたべてしまう。
- (45) ひとりて降園の仕度ができない。
- (46) 自分の持ち物を所定の位置においたり、管理することができない。
- (47) 上履と下履の区別がつかない。
- (48) 園のきまりが理解できない。
- (49) 園のきまりが習慣づかない。

対人関係

- (50) 耳をおさえている事が多い。
 - (51) 目があわない。
 - (52) 人のいないところを好む。
 - (53) 友達からの働きかけをいやがる。
 - (54) (それは保育に役立つ・困った問題が生じている)が気に入った子どもがいる。
 - (55) 他の子どもがやっていることのみねをする。
 - (56) 他の子のやっている事をよくみている。
 - (57) 自分の方から子どもに働きかける。
 - (58) 先生のそばにばかりいる。
 - (59) 担任保育がわかっている。
- 言 語
- (60) ことばがない。
 - (61) 奇声を発する。
 - (62) ひとりごとが多い。
 - (63) 言葉はあるが会話にならない。
 - (64) その場の状況の説明ができる。
 - (65) 発音が不明瞭で何を云っているかわかりにくい。
 - (66) 不完全だが自分の要求がいえる。
 - (67) こちらのいうことがわかる。